



田舎  
詠歌大概抄  
上



詠歌大概抄 上下六卷 細川幽斎著

天正十四年(一五八六)藤原定家の詠歌大概  
秀歌大略三三條西実枝の講義せし折の園  
書をまとめたもの



京極今ノ寺町  
不リ以号トスル  
号ノ致ノ故



詠歌大概

河子元祖長家言曰

此抄の作者

定家為家

為氏二条

京極黄門定家

初ハ光孝又孝光後改定家  
法名明静仁治二年八月廿日薨時年  
貞承元十一月朔發

此抄乃發起

後鳥羽院中

河子元祖長家言曰

槐科言

此抄の時代

定家院二条院應保二

後成二年

此抄撰時當小をせらるるの由取所此抄の

外著候親王の御事也然志此抄は定家の

不徒く書連わす由我くむむなるもの

貞承三十一

貞承三十一

詠 既文も初也 増頼より 詠字も 徳也 或いは

あはき事又 悔とのけく 永々と書くみしより

詠 既文も 詠也 徳也 のけく 永々と書くみしより

と 悔も 悔也 とり 種名と云ふより 乃若と

詠と云 詠の 悔也 考へて 吟味も 乃若と

の 打葉も 乃若と 又 樂も 合すと 詠と云ふ

紅葉は 乃若と 源氏の中 将も 海波と 舞は 乃若と

詠も 乃若と 乃若と あり 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

詠 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と

乃若と 乃若と 乃若と 乃若と 乃若と



歌哥ハ木ノ枝ナリ  
欠ハ凡ノ吹ナラズナリ  
凡ハ音ナク本ノ又ナリ  
情ハ天九開剛ノ古モ  
先發凡

不年

又立カワテ奇ノ姿ヲ委ノ詩ス  
静カク人の声と秋と云秋ハ柯也若木ノ柯葉

有リテしと云ハ無心ノ若木也柯葉カクハ

心と云ハハ此若木此ニ海ノ小枝と生ハ

と云ハけり花ノハ若木と云ハ柯葉

ハノノノノ也人ヤシト凡雅ノ唯此と云ハ

ワノ若木ハ草木ノ柯葉ナリ花実と知

ふリハ秋ハ若木と云ハ柯葉ナリ

ワノ若木と秋ハ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

若木ノ若木と云ハ柯葉ナリ

長子 百来二千ナリ  
二字ノ交一テ一字トスル  
心ノ長一ノ心ヲソメテ云  
長子 百来二千ナリ  
二字ノ交一テ一字トスル  
心ノ長一ノ心ヲソメテ云

昭明太子文選序 若其紀一事ノ録一物風云  
本奥意出 會款流 推廣之辭 賦美  
是 藝經分判 功德云云 亦以千第 偈款 録結業  
とありと 似 意 隆乃 偈と云ふ 亦 千也 款 舞力

神代ノ 始と云ふ 是也 和款 世 錫事  
二神ノ 評 小云 三在  
あはれ 是 心 在 序 ぶ 云 云 の やう して あ ぬ ぞ  
あはれ 是 心 在 序 ぶ 云 云 の やう して あ ぬ ぞ

人ノ 志の あり こと け 原 して 今 の 在 乃 款 是  
いふ こと あり 心 の こと あり こと の あり こと  
その 心 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

れ なる こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
録 業 意 出 會 款 流 推 廣 之 辭 賦 美  
これ なる こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと

長子 百来二千ナリ  
二字ノ交一テ一字トスル  
心ノ長一ノ心ヲソメテ云  
長子 百来二千ナリ  
二字ノ交一テ一字トスル  
心ノ長一ノ心ヲソメテ云

字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと  
字 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと











二多承二心ノ新  
有トス是知可ノ心  
故初ノ頭ス

情欲新為先

有ノ未解之心解

有ル一ナリ

欲ヲ一ニテ七情ト  
スルト不立ニテ六情  
トスルト信ノ字ノ  
例ニテ明ス也

親文ノ情ハ人ノ性新為ニ欲ト云言ハノの法  
之ハ氣ノ物ノ心ニ在リ也  
白虎通ハ六情ノ法ハ何リ喜怒哀樂也  
之ハ情ト云ハ喜怒哀樂ノ六情ト云ハ欲ノ字ト云  
如ク之リ白虎通ハ六情ト云ハ欲ノ字ト云  
陰氣ノ欲ト云ハ情ノ事ト云ハ欲ノ字ト云ハ  
之ハ欲ト云ハ欲ノ字ト云ハ欲ノ字ト云ハ  
曰ハ信ハ皆ハ情ト云ハ欲ト云ハ欲ト云ハ  
ト同也又七情ト云ハ喜怒哀樂ト云ハ  
遺子ハ情ノ六情ト云ハ情ト云ハ

性理定義ハ情ト云ハ欲ト云ハ  
感ハ通ハ情ト云ハ欲ト云ハ  
禪法ト云ハ情ト云ハ欲ト云ハ  
象ハ情ト云ハ情ト云ハ欲ト云ハ  
情ハ心ノ織ノ之ニ差別あり  
心ハ未承ト云ハ物ノ心ト云ハ  
情ハ心ノ織也所織織微ト云ハ言ハノ心  
之ハ情ト云ハ情ト云ハ欲ト云ハ  
ナリ也情欲ノ法ありト云ハ言ハノ通貫  
ト云ハ言ハノ心ト云ハ言ハノ心  
孔子曾子ニ告ル語  
曾子ノ心貫ルト云ハ言ハノ心

孔子曾子ニ告ル語

仙家ニ夫テリ唯ハハ虚空ニ  
ハ身ヲ理スルハ子ニハ心也

又其物居心の前理と具して常淨の意

者也といふ事とあつらん也

心法即縁才親縁唯心法といふて二由乃るまらん

心法は本きて塵法はまらぬあんの心法は貪瞋

癡は海うん三世の法をして推して心法

の法は心は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

は心法は心法とあふれん心法は心法

古今亭より神世七代何人傳はるる

平了未作

井ノ世二成テ哀樂相変スルニ至テ可ク  
讀侍也

又在京中將く歎其情は能く判不足と

手紙情勅お申詞形お外も

禮記恭道禮侯道仁真道情

祇は情の字に穢の句也情ノ字ヲカレテ猶意味ヲ註スルハ

夫比よりし情と書来禽歎よあらふ

志なきは情の字と書来事面白也

おのころの言葉は物と作し

集と分ちてなるとは也古今集よ

字ののらと情と書来事面白也

忍ぶ情と書来物よ付ていひ

の字よりあつしけ字と書来事面白也

情の字のまゝと書来下の小書よ来

心細くといふはけしと書来事面白也

新 親文日初也新親文日初といふも

の理也といふはけしと書来事面白也

先 親文先前進也陰氏はけしと書来事面白也

と書来事面白也

左傳よくおとすといふの志と書来事面白也

終ありいふはけしと書来事面白也

情新といふはけしと書来事面白也

情の字の  
正下の合して意味











心孝を伝へりて  
よきことなり

紙は新とてしるすんといふもたすやし

菊は一花のあわり先達をかんふにうりく

とらふもあはれしるふおのれをさじりし

かゝるはさあしとくわたりしあふのき

ふらふあしりしあふ又目あきつらぬあふ

あふとてしるふ菊はあしりしあふあふ

とてあはれしるふあふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

冬

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

あふとてあはれしるふあふあふあふ

冬

あふとてあはれしるふあふあふあふ

此のくもつあうも也人のくものくもつあう  
詞の可用 詞の可用は三代集先達之所用  
又新古と古人の可用と用と

又新古と古人の可用と用と

は義夫と名は似たりと之をく理甚深也  
女注の詞其理甚深

其の意はくもつあうと代集の詞よりたてりんとく不意  
用之古今よあはれとくそあはれとくあはれとくあはれ

は新也又三代集の節は新也と詞よりたてりんとく  
その意はくもつあうと物多くとく隆盛はくもつあうとく

とく詞と除くはくもつあうとくいまはくもつあうとく  
新古今古今年一回の詞とく三代集の節はくもつ

詞よりたてりんとく代集とくあはれとくあはれとくあはれ  
去の意はくもつあうとくあはれとくあはれとくあはれ

はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく  
代の集也とくはくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあう

はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく  
用はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく

はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく  
はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく

はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく  
はくもつあうとくはくもつあうとくはくもつあうとく

乃初よりとる由代新續古とては流儀撰集也  
左古人の類よといふ所の用人の事多岐也  
凡そその事古といひ和字の項との集こと成集  
またその面新抄よりとるとも亦亦り流儀  
して金家系詞類とてとると其風様一と  
とありのうとてとてとてとてとてとてと  
流儀の撰集と撰集とてとてとてとてと  
會と類乃る中興より新古今は流儀と定  
流儀撰集の行りてとてとてとてとてと  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
乃初撰集とてとてとてとてとてとてと

新古今より花の道とてとてとてとてと  
実とてとてとてとてとてとてとてと  
乃撰集とてとてとてとてとてとてと  
花実おむ初人の字者の大先む所集と  
ふより先撰集とてとてとてとてとてと  
代集とてとてとてとてとてとてとてと  
菅光園抄改訂とてとてとてとてとてと  
らむとてとてとてとてとてとてとてと  
乃の撰集とてとてとてとてとてとてと  
しとてとてとてとてとてとてとてと  
心もあつとてとてとてとてとてとてと

草庵集の後撰撰  
同二ノ三月行

大徳寺

後ノ分ノ手モ入ラズ





ゆゑに神はあはれあつたまはし  
風神の事まゝに九尾の風神と云ふ  
いふれふことと云ふは是と人  
見ゆ書より始てはゆるつて衣冠  
てのらありてふ物乃を事ひて  
のたもつらつたつては是と人の  
らる物也これ風神の事一と  
いら相風神の三輪乃ちと具  
てあつたまは

今更て申さば  
心は美成人も風流  
なりんも風神あり  
りとは足あつた物

是と云ふはゆるふ人乃らまゝに  
人の言はれ目も鼻も色も  
をくそそはらるる人もあり是  
て乃風神の事かありぬあり是  
ありてはあはれ鼻は鼻れを  
そと神と云ふ世乃風神いら  
鼻はまゝに目のありてはあは  
して面白くもやう也是風神  
これ人の面神の事生ぬ風神  
りてはあはれ鼻は鼻れを  
同し衣冠と云ふはあはれ  
登りてはあはれ鼻は鼻れを

金玉ノ詞シハワラヌト  
イハレ風神アリキハ  
衣裳ノキナシアニキ  
カ如シ

息よかりてこそ... 此の如く... 勝の威儀... 信の是信信... 今ノ世ニモ... 其ノ身ニ福アルヲ...

宗親... 後流... 沖子... 軍始... 一弟子

サイコウ

西行抄第一

虎の

虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の... 虎の...

時行... 況や... 出レ... 儒佛... 初テ... アラス

ナクサ... アラス







是のあはれもり経表す。無常のふもいふ事と  
 其のいふ中とするにふつとつとあつて王物あり  
 又徳能の先を述ぶ事として毎夜よ秀平の  
 色なきにあはれにけり。其の徳能の先を述ぶ事  
 よあふともいふ也。大切の事あり  
 唐人の約一首よそも子歳乃ほすそ名  
 といふ事。其の一日幸乃留いふ。一旦秀平  
 あらぬ。其の徳能と先を述ぶ事。いふこと約  
 よりも平乃たす。いふ事也。いふこといふ  
 れり。先徳能といふこと。道よふ。いふ事也。も  
 不徳とて。是用とて。是事との。おき。いふ事。

徳也。先達とて。いふ事。又。一。ま。ま。と。い。ふ。事。也。是。用。也。道  
 老とて。道とて。いふ事。道乃。徳。之。の。儀。也。い  
 口。徳。乃。あ。ら。ぬ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 先達。い。ふ。事。也。徳。能。の。先。を。述。ぶ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 け。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 下。と。い。ふ。事。也。又。一。ま。ま。と。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 色。先。達。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 色。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 徳。能。の。先。を。述。ぶ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。  
 と。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。い。ふ。事。也。

旧一物小あし  
百首五十首の内ニ  
一首ハ二首ハヨキヤ  
アレヒソレハミレモ  
ナリ地手ヨミスユ  
ル下成難シ

と分るすさそと  
編むに百首三首と云ふも神よあふと云ふ  
考訂神大略百三首  
と云ふは眞上百首首と云ふと定てのせらけ  
ふ是也し千と云ふ事よカク思入三也云々  
乃用えありは眞の千よカク思入と云ふを  
その詞と云ふと云ふは此年の面敷京氣乃  
ありと云ふと云ふは世千乃風神と云ふは  
ふ事ありと云ふは云々  
よはも生か風流たか極神ある云々

いふと云ふと云ふは世千乃風神と云ふは  
ふ事ありと云ふは云々  
よはも生か風流たか極神ある云々  
いふと云ふと云ふは世千乃風神と云ふは  
ふ事ありと云ふは云々  
よはも生か風流たか極神ある云々  
いふと云ふと云ふは世千乃風神と云ふは  
ふ事ありと云ふは云々  
よはも生か風流たか極神ある云々

耳見ニルタハ  
耳見ニルタハ

大板

あぬ人共一後如 なる長一なるは  
筆にあらんころけ 墨色に経ゆらひらと  
らんよ甚るしとけ けみりし筆連を常一かり  
て流る日をもし 筆の如くしむらあやし一筆を  
人長きぬ人のうらあか一もとらぬ  
ひとたまりきとあか一も也平一う  
と向一西縁一物よあり一とととけ  
不倫古今を遊一たて勢一可敷其科  
ほの妙一  
ヨクアヤキエハスルヤウニ讀  
為あつと平一乃流の事相ぬ一に  
信けらるる一と一うらあか一

八雲口傳

とけらくつけらきたあけら終よらぬ  
杖本とあし一筆一と那をらあせられた  
まんねも一どあど下ふあ一下る句と  
ふあてあか一かどとらあ一ととと  
一回一と紙一うらうつ一あか一  
一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と  
らけらあゆ一と一と一と一と一と一と  
つとても又よ捨あか一と  
よの身と一は筆の成をりま一と一と一と一と一と  
は平初文字あてあか一と一と一と一と一と  
たり尾まればあゆ一と一と一と一と一と

後拾遺  
忠

續古今

吉野の事は... 已上三首有

海をわたるつらき身 全行を拂ふ事難し  
... 日よれぬも... 又云昔の事... となつて大あり... 万葉より古今時代... 願補後成... けり其人...

この心よ... 物あり... 近代之人所詠... 七十八年... 考之故當代

是れわの心... 秋の奥儀... 義而祝偈言... と宮人と... 一の心と... ぶらさふら...



貞應元年の古今十  
政玉の年

味の覚懐とあるは、  
の事も也 貞應元年  
は元々、  
ゆへに

八雲月を詠の身一  
人のさかえ  
し、  
うも  
し、  
ま

つはとあり  
よ  
也  
な  
か  
し  
あ  
よ  
雅  
澄  
と

大和

十一





乃乎也甚矣朝廷

帝は社司と成りし事ありては

今も其の社司と成りし事ありては

白雲の社司と成りし事ありては

此の事ありては

ふもその事ありては

やうにその事ありては

松古人歎き多し其詞録に云はるる例

いまは近代の人の力を出して網と用は

しき事と割と

は所ありては

と云は三代集の作者と括りの人

の集乃作者なりとあり

文脈の如き事ありては

それと云はてもその事ありては

松古人歎き多し其詞録に云はるる例

いまは近代の人の力を出して網と用は

しき事と割と

は所ありては

と云は三代集の作者と括りの人

の集乃作者なりとあり

文脈の如き事ありては

それと云はてもその事ありては

万葉古今後撰拾遺  
後和歌集五代集ト云  
又一説二万葉ヲ除テ  
金葉近シク五代集ト云  
是ヲ用エ然ルニ五代集  
皆本奇ニ取ト云説有  
サレバ後拾遺ト云カ  
ヨキ

通躬ハハ  
連綿ハハ  
アリキタリタルト云

三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十

もよもよとぬ取むがうもありのとよふあつらふふ  
古きとぬ取むありの或き詞とぬくはとぬあ  
ありの或らふうぬ物とぬ家ありあふ  
詞とぬく風情とぬくあふありの風情とぬ  
事むと昔うぬぬとぬ物とぬ家とぬ  
月夜とぬあつらふあつらふあつらふあつらふ  
我宿の梅屋のうぬあつらふあつらふあつらふ  
是らとぬ詞とぬうぬて梅と月とぬうぬ  
うぬあつらふあつらふあつらふあつらふ  
詞とぬくぬとぬうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
あつらふうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

法よは地なりヨリ又  
一段く前四首ノ奇  
トハカハリ本テウの心シ  
カヘテ取レリ

後一

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十

じよき乃果に過るは井井此あるはも今より世あり

とていふは *後四ノ同遠ニト也*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

とていふは *三光院*

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

三光院

かまの此詩の出入  
疎影横斜水清淺  
暗香浮動月黃昏  
こゝに併せ供ふ。

山程彷彿千尺一丈花といふと横川の湯沸  
千尺一葉花とせられぬ是の中よりと云乃  
多事也一字とく一白名別の物と云々  
此多物也 行院 八月梅花と云云してらと云  
字のさり約乃約よ 春日失之秋日得撰斜  
疎影 楚人らと云と云と云今乃世の人取用か  
と云ふふ下ゆ事也 是は建仁寺十世後信 云媒信  
路草蕭々自若雲林を市朝云道世間唯  
白髮貴人取上不易饒と云 山言が胡為陳師  
道白髮三徑草と云八字と十字と云つて免  
て意味あるを妙と云と云り杜子美の唱也

天樹江東日暮雲といふと山言うを 奈穂  
樹色沙簾著鐘声といふふはと云りかた  
まはといふと云りといふと云ふと云事也  
を代後れり云と云やう厚く云ふ事成る  
それと云と云と云と云ふ事なり  
あはるりといふと云と云  
古今春上  
たを以て  
春上たを以て

後撰集  
拾遺春  
後  
かまの老もこれけい美の花の面と云ふ事あり  
とよめからうと云入ためあり  
かまの老もこれけい美の花の面と云ふ事あり  
とよめからうと云入ためあり

大般若











拾遺五

秋のそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまきた

後撰

控ゆるたけし中紅をたけしにたけし人わきとてまき

後撰

やまのそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまき

後撰

櫛の思ふらふのそよまきとてたけしにまき

新古今

白木の神乃るそよまきとてたけしにまき

万葉

あらしの神乃るそよまきとてたけしにまき

後撰

契とてたけし中紅をたけしにまき

古今

そよまきとてたけしにまき

拾遺五

秋のそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまき

後撰

櫛の思ふらふのそよまきとてたけしにまき

新古今

白木の神乃るそよまきとてたけしにまき

万葉

あらしの神乃るそよまきとてたけしにまき

後撰

契とてたけし中紅をたけしにまき

古今

そよまきとてたけしにまき

拾遺五

秋のそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまき

後撰

櫛の思ふらふのそよまきとてたけしにまき

新古今

白木の神乃るそよまきとてたけしにまき

万葉

あらしの神乃るそよまきとてたけしにまき

後撰

契とてたけし中紅をたけしにまき

古今

そよまきとてたけしにまき

拾遺五

秋のそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまき

後撰

櫛の思ふらふのそよまきとてたけしにまき

新古今

白木の神乃るそよまきとてたけしにまき

万葉

あらしの神乃るそよまきとてたけしにまき

後撰

契とてたけし中紅をたけしにまき

古今

そよまきとてたけしにまき

拾遺五

秋のそよまきとてもくわき若菜とてたけしにまき

後撰

櫛の思ふらふのそよまきとてたけしにまき

新古今

白木の神乃るそよまきとてたけしにまき

万葉

あらしの神乃るそよまきとてたけしにまき

後撰

契とてたけし中紅をたけしにまき

古今

そよまきとてたけしにまき



あまは夕陽のしずかをかり

二句の上二句字絶き

恒人そとの京極貴門詠

送玉集

山橋戸と楊小ゆかたうのく維とゆらん

中平万葉

神皇正統記  
恒人托

皇城の山橋戸と楊小ゆかたうのく維とゆらん

右是二句の上二句字絶き

送玉集

皇城の山橋戸と楊小ゆかたうのく維とゆらん

中平万葉

送玉集

皇城の山橋戸と楊小ゆかたうのく維とゆらん

恒人

い糸眼と付

八雲あやふさあやと光り

ふりりあやとせんあやくふあやりあやと親あやああやさあやく

けそあや乃あや塵あやあり

夜日休あやの百練あやして字あやとああや千練あやして白

とたあやととあや約練あや玉屑あやのふんあやえあやのりあや山岳あやと季

練月あや粧あやとて季あや練月あや粧あやて葉あや一あやとふあやと序

よあやんあやえあやのりあや葉あや之あや一あや首あやと十日あや世あやのふあや葉あやを

一あやとたあやり

水阿あやとあやのあやしあやひあやのあや初あやああやるあや今あやのあやああやもあやしあやるあや

そあや乃あや桂あや枝あやよあやつあやつあやとあや通あや州あやのあや境あや一あやとあやふあやらあやるあや

三情よ入るる心は面影の如く  
ゆくり人のあはれをいと恋とて  
山本一かたがねの洗田とて人のあはれを  
其六人他巻集も百首より及ぶ  
花山信村上の集も百首より及ぶ  
集の序に終あり段首の序に終あり  
ゆくり人のあはれをいと恋とて  
ゆくり人のあはれをいと恋とて  
ゆくり人のあはれをいと恋とて  
ゆくり人のあはれをいと恋とて  
ゆくり人のあはれをいと恋とて

ゆくり人のあはれをいと恋とて  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死  
以同事一休古年詞皮無念死

以同事 詠古年

詞類全命

同事... 月... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

物... 物...

此同

新古

定夜

日

大台重

日

通具

後概

遍昨

新古

占今

後概

日

下

あはれいふ事細き月一  
有きつる事世に何事と  
千とふ事もの事さし  
海子いふ事也といふ  
しきいふ事その物と  
は古事といふ事いふ事

アカヌヤウニ書ハシ

ひびき新緑意難秋以  
岩く時ふれ古事  
は故事といふ事いふ事

月来り秋よりと  
物日け白ふ山ふと  
とふと

初月けふふ山  
山いとふ時わさ  
とふと定事  
我者ハ梅の古枝

初古  
有象  
東  
松愚  
拾遺  
本意







大抵三  
九條殿  
御とりの家やう也むる下子ゆに書光園

乃持政の信よ文字此系ハ海邊ふれとも

又甲子ハ其のあも一ハ御宗乃彦と云

事ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

事ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

ハ其のいもあも一ハ御宗乃彦と云

勢約に信撰信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

平中流之信撰信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

字ハ其の信書と云也これハ其の信書

行抄

ハ其の信書と云也これハ其の信書

九條殿 骨の厚キ  
のふやう也むふ 下子ゆし 晋光園  
のゆるな文字 九條の海邊ふれとも  
のまらまあるく 一物平乃底 ことと云  
子いむあ人さま 一こと作らまけ  
彼名の物よてうしあし とも若利  
とも作し三十一字いけくろ物さ  
ころあく極あさ 一物平乃底あり  
あふらうあふとあを祓する人乃方  
いけまーさーこのあめらういけ極  
よてんえころ結書百家の書物  
もあふあ人さまのい古今作  
信撰信書と云也これこの信書  
度也ふるていといと云書とあはし  
を惟撰之云因光陰度信よ結るを  
みるいづ道もどありあくとことと云  
約あることい除目乃事とあはれ  
推乃此道 和字人者深信作云云  
い古今後撰の中ふ伊勢物語  
の富あり一説不食の花実お射の集 後撰の集ふあふ集  
伊勢物語の記乃るさうり物たす  
と云合々古今の法り 意と云  
あ角と高流の心を伊勢物語の河  
らしあ乃物されとも古今いけの  
これい先第一よささていけさうも伊勢

行抄  
ははる所の事強てう道ちもさ  
けりけりまーとささういさ  
たうちうたさ其れんあ可保と云  
ゆきうたの信をうあ中まても  
ころあああは信物にーと云  
さうあああはううー真る所の  
法ありーとわさあくとれらる  
さう

物類の時代を平一と記す言はれは抄撰  
しるし下に並ぶるは中二の字も入る也

三十六人集之因 三十六人下之止事秘傳也

三十六人集といふは信乃撰出の集也とこと  
くの字人の中は清撰也聖といふことあり  
とこと三十六人の中てんや小松上は乃秀平  
ゆへと也は信乃字之門も字者乃と  
とつてふ事と事と一免の字は此乃字同  
あつる中一小松は右今伊勢物類と好撰於遠り  
あつたの字も三十六人集の建もあ  
る一は信乃撰出の集也と事と中一は  
乃と事と一は信乃撰出の集也と事と

乃と事と一は信乃撰出の集也と事と  
りと事と一は信乃撰出の集也と事と  
伊勢小松は右今伊勢物類と好撰於遠り  
あつたの字も三十六人集の建もあ  
る一は信乃撰出の集也と事と中一は  
乃と事と一は信乃撰出の集也と事と  
日と事と一は信乃撰出の集也と事と  
と事と一は信乃撰出の集也と事と  
親乃字は信乃撰出の集也と事と  
近信 重雲院開白種松乃字は信乃撰出の集也  
後成於捕信捕は信乃撰出の集也

信乃





とよきかへ自の能と云はてぬらん  
ふすせりあり勢たりしゆ  
しりきりきりきり

誠よくいりし割禁本中  
宣と時宗京親乃内入ふま  
や東大将定國深由河親父の  
しふ夜もけぬて親をわら  
大うは月り

<sup>大和物語</sup>  
鶴乃やとほ橋の言れを  
とりありしゆと親をさ  
つとこり

在間感者 是又作志乃  
日さうと親系志も今日ハ  
とふ志を志をさうと又志  
あまは老少あまのあは定  
ととく解先大夕部よハ部  
とふあふい人君服あ乃も  
は吾道なるあ一子の申さ  
の親会ありんやととむら  
て唯由一念くまて也され  
も幾夜あるるりくわま  
おは乃る一物も又説八相

花ヲ見テハ月ヲ忘  
月ヲ見テハ雪ヲ忘  
ルハナリ奇人ハ心









歌の5

多分この世に遊名鏡流より  
——但師流の文に二流よりくると  
多々師流後継の文に別れが師流  
と云ふ言ふも之は流書のをきく故  
に師流後継所は之を學ぶに外なり  
あつて流書と云ふ





唯

以田款為師曰下とらりもの何とすくも也

ありの萬葉とらりて秀草の師ハ

合三代集まると曰下とらり海也

能因也結つ家ふもくお結能周とわあ、何

やうと下諫外 長結云

山詞花集二ノ江無言のたふくはあまはあまはらけらとあまは

のけ師下とらりて色とらり師とらりて

深心とらりて又とらりてもまらあまらあまら

古下りるあまらとらりてとらりてとらりて

わ平のあまらとらりて

お親お先達とらりてあまらとらりてとらりて

わあ、所とらりてとらりて又とらりてとらりて

わらりてとらりてとらりてとらりてとらりて

先達とらりてとらりてとらりてとらりて

河結とあまらとらりてとらりてとらりて

ゆりあまらとらりてとらりてとらりてとらりて

可く結つとらりてとらりてとらりてとらりて

あまらとらりてとらりてとらりてとらりて

結つとらりてとらりてとらりてとらりて

て結つとらりてとらりてとらりてとらりて

家、結つとらりてとらりてとらりてとらりて

紅葉走乾鹿在林

先達ニ習フハ遠キ  
先達ナリ眼前ノ  
ニハアラヌ



